

「物語る権利」を救済する ——チャールズ・テイラーの哲学における「道徳的なもの」と孤独のパ トスの歴史的展開——

立命館大学大学院国際関係研究科

国際関係学専攻博士課程後期課程

まつい のぶゆき

松井 信之

本研究は、カナダの哲学者チャールズ・テイラーの理論体系の解釈を再構成する試みである。その際、テイラーが近代的自我の形成にどのように着眼して、その生成の過程を理論化しているかということが主要な論点となる。

テイラーの哲学を理解する際の先行研究の語彙は、個人と社会の相互関係のあり方を問題の中心に置き、リベラリズム的な政治哲学に対して社会性のレベルを個人よりも優位にあることをテイラーが最も強調しているという側面に軸足を置いてきた。簡潔に言えば、テイラーへの既存の理解は、近代は端的に個人化の過程であるが、その趨勢に対して共同体的枠組という一定の制約を再び見出す必要があるというフレームワークに依拠しているとするのである。

だが、こうした視点において捨象されていることは、特定の文脈の内部で社会化される個人が近代世界の内部においてどのように体験されてきたのかという問いである。本研究は、この問いをテイラー自身が哲学的探究を推進する主たる思考の源泉であると位置づけるものである。

実際のところ、テイラーは、マルクス主義的な伝統に連なる「全体性」の思想や、近代文芸史を論じる際にしばしば強調する「感情」や「創造性」という概念を通じて、諸個人が自我の内部に「自己実現」の潜在性を見出していく歴史的・社会的な過程を明らかにしようとしている。本研究は、これまで解釈の対象として深められてきたとは言いがたいテイラーのそうした議論の側面を重点的に扱う。

この点において、テイラーの哲学的探究は、本研究のタイトルにある「物語る権利」という主題と結びつく。普遍主義的な進歩の物語が広く共有された局面としての近代から、そうした社会性が自明性を失うポストモダンないし後期近代への移行に伴って、個人と社会の関係性を再考する潮流は現代の社会思想の領域で広く共有されている問題意識である。

テイラーは、私たちが近代世界の形成という長期的な過程を通じて、伝達困難な自我の深い内面性を形成してきたことを明らかにしようとする。彼の哲学からすれば、近代化とグローバル化というコミュニケーション可能性の拡大過程は、同時に、それ自体としてコミュニケーション不可能な領域を各自の内部に生み出していく過程なのである。しかし、この深い自我体験は、他者との新たな対話的な関係へとつねに結びついていく可能性をもつ。自我体験の深まりにしたがって、私たちは、つねに不安を伴う流動的な過程のなかで他者と共有する空間を創造的に生み出すことができるのである。